

## 神戸女子大学・神戸女子短期大学における教員免許更新講習について

教員免許更新講習は、平成19年に教育職員免許法が改正され、平成21年4月から実施されています。これは、近年の教員をめぐる大きな状況の変化、社会構造の急激な変化、学校教育における課題の複雑化や多様化など、その時々で教員として求められる最小限必要な資質能力が保持されるように定期的な刷新と確認を行う事を目的としています。教職生活全体を通して教員として必要な資質能力を保证するためのものひとつとして教員免許状更新講習は始められました。

平成21年4月以降に授与された教員免許(新免許状)には10年間の有効期限が定められており、有効期限の切れる2ヶ月前までの2年間のうちに大学などが開設する教員免許更新講習を30時間以上受講・修了し、都道府県教育委員会に申請すれば、再び10年間有効となります。

また平成21年3月31日までに授与された教員免許状(旧免許状)には有効期限が定められていませんが、旧免許状を有する現職教員には生年月日に応じて修了確認期限が設けられており、新免許状所有者と同様に教員免許更新講習を30時間以上受講・修了し、都道府県教育委員会に申請して更新講習修了確認を受ける必要があります。

神戸女子大学・神戸女子短期大学では創立以来、教員養成を柱の一つに掲げ、地元近畿はもとより各地に数多くの教員を輩出してきた歴史があり、それぞれの地域の教育に大きく貢献し、また高い評価を得ています。

教員養成を柱の一つに掲げる本学の理念に鑑みて、教育現場で活躍する卒業生、さらに地域の教員の方たちの免許更新へのニーズに応えることが教員養成を担う大学の社会に対する責任と考え、制度開始当初より更新講習を開設することにしました。

大学に於いては本実施開始1年前の平成20年に予備講習として6講座を開講したところ文部科学省より依頼があり政府広報番組にも取り上げられました。

平成21年の本実施年度からは短大も更新講習を開始しました。平成20年の予備講習を含め平成23年度までに大学は合計507名、短期大学は合計210名が受講しました。

受講した先生方からは「指導要領改訂のポイントを教えていただき助かりました」「すぐに明日から実践できそうです」「ねらいや到達目標が明確でした」「資料も内容も思った以上のすばらしいものでした」といった感想を多数いただきました。

現在中央教育審議会の教員の資質能力向上特別部会において教員養成の在り方や教員の採用・研修など教職生活全体の改革について議論されています。その中で教員免許更新制についてもその在り方が議論されていますが、本学では現在の制度が続く限り更新講習を開講する予定です。



多くの参加者を迎えて講習が開始される



家庭科教育の講習



理科教育の講習

学園サポートセンター事務局(須磨キャンパス教職支援センター) 多畑 寿城

## A-STEP(研究成果展開事業 研究成果最適展開支援プログラム)に 神戸女子大学家政学部の2教員が採択される

A-STEP(研究成果展開事業 研究成果最適展開支援プログラム)は、文部科学省所管である独立行政法人科学技術振興機構が実施している研究助成事業です。大学・公的研究機関などで生まれた研究成果をもとに実用化を目指すための研究開発フェーズを対象とした技術移転支援プログラムです。

A-STEPは、大きく分けて「フィージビリティスタディ(FS)」及び「本格研究開発」の2つのステージから構成されます。FSステージには3つの支援タイプがありますが、その目的に応じて、企業化への視点に立脚して技術移転の可能性を探索する「探索タイプ」に、本学の2名の教員が採択されました。

その他の支援タイプには、産学共同でシーズとしての可能性を検証する「シーズ顕在化タイプ」と、ベンチャー企業設立に向けた研究開発に先立ち、起業の可能性を検証する「起業検証タイプ」があります。

平成23年度第1回FSステージに、家政学部家政学科の山根 千弘教授と大森 正子准教授が、「探索タイプ」で採択されました。採択課題とその研究概要をふたりの先生に説明してもらいました。

### ①山根 千弘教授

採択課題:セルロース/水酸化ナトリウム水溶液から精密構造制御されて得たナノ食品  
研究概要

セルロースはレーヨンやキュプラなどの再生繊維、セロファンやスポンジなどに広く使われています。セルロースは植物に含まれている天然物なので、本来可食性のものなのですが、前述の製品は食べことは出来ません。食感的に無理なこともあります。これらの製造過程において食品の加工には使ってはいけない化学物質が用いられているからです。

一方、我々の研究グループはセルロースを水酸化ナトリウム水溶液に溶解することに成功しました。これにより初めて、セルロースの形(構造)を精密に変えて(制御して)食品に応用することが可能になりました。そして油脂エマルジョン代替のノンカロリークリームを調製することができました。セルロースはカロリーゼロなので、ノンカロリーマーガリン、オイルフリーマヨネーズ、ロカローリー及びノンカロリーパンなどに展開中です。さらにこのセルロースは、経口的に摂取された変異原性物質を極めて効果的に排出できる可能性もあり、食の安全にも貢献できるかもしれません。



山根 千弘教授

### ②大森 正子准教授

採択課題:セメント製法に対するポロネーゼ製法によるコンフォートバンプスの開発  
研究概要

市販されている靴の製法の多くはセメント方式であり、長期間履くことで、足部アーチが崩れる事を防ぐため、中敷きにクッション性を持たせ、アーチをフォローする形状にしたり、足部変形に合わせて高価なオーダー靴や個人に合った中敷きを特注するといった、対処療法がされています。また、これまでのコンフォートシューズは機能性重視で、ファッション性が低いものでした。そこで、ファッション性が高く、足部変形を伴わない靴の開発を目的として、靴製法の違いが足部や歩き心地、はき心地の改善に与える影響について、人間工学的に明らかにするため本研究を行うにいたしました。本研究は、神戸市商工会議所をとおして神戸ケミカルシューズ企業と共同で、前足部が袋縫いでフィット感が高く足あたりが柔らかいことが知られているポロネーゼ製法と従来法であるセメント製法による靴の歩行実験を行い、履き心地、歩き心地のよい靴の条件を明らかにし、新しいコンフォートバンプスの開発と提案を行っていきます。



大森 正子准教授

## 大学院情報(論文の概要)

### 平成22年度博士学位授与者 博士論文概要

平成23年3月16日(水)に中村 芳久氏と鎌谷 かおる氏に博士学位がそれぞれ授与されました。  
中村氏は神戸女子大学文学研究科英文学専攻、鎌谷氏は日本史学専攻として初の学位取得者となりました。

＜論文博士＞ 中村 芳久(神戸女子大学大学院文学研究科英文学専攻へ提出 主査:河上 肇作教授)  
論文題目「認知文法理論 -主観性の言語学-」



本論文は、Langacker(1987, 1991)によって提唱され、その優れた理論的体系性によって現在発展を続けている認知文法理論(Cognitive Grammar)の研究である。現行の認知文法理論の問題点を指摘し、その解決のため、主観性に関して新たな視点を導入することによって、さらに説明力のある言語研究の枠組みを提示している。あらゆる言語のあらゆる構文の構造記述が可能であり、各言語が好む構文群を特定し、その好みメカニズムをも明らかにするような理論を標榜するには、認知文法理論が認知基盤とする観る・観られ関係に関して、観る側と観られる側が未分(主客未分)であるような認知様式(1モード)を導入し、かつそこから観る側と観られる側が対峙するような(主客対峙の)認知様式(Dモード)へと展開する過程を考慮する必要がある。それによって、日本語をはじめとする主観性の強い言語群が自然に捉えられ、言語対照さらには認知的な言語類型論が可能となり、文化化の精緻な分析から言語進化の議論までもがその射程におさまることになる。

＜論文博士＞ 鎌谷 かおる(神戸女子大学大学院文学研究科日本史学専攻へ提出 主査:今井 修平教授)  
論文題目「日本近世における生業と地域秩序形成の研究」



本研究は、近世の琵琶湖周辺地域を対象に、生業の実態とそれにより形成される地域秩序のあり様の検討を通じて、日本近世社会の特質を解明することを目的としたものである。とりわけ、漁業を主たる分析対象としており、琵琶湖全域で起こった漁業争論の史料を用いながら、漁業社会の特質を解明し、中世末から近世における琵琶湖全域の漁業秩序形成の段階的な把握を試みた。また、堅田(現大津市堅田)の商人の商業活動および、漁業経営への関与や、領主支配との関係を分析し、地域における生業と支配の問題を検討した。本研究は、日本社会において形成、発展した地域秩序を、生業の維持という視点で分析しようとするものである。近世史研究において、こうした視角は非常に有効なものであると考えている。

## 教養科目情報

### 大学・短大、就業力向上のための新キャリア科目が開講

厳しい雇用情勢や価値観が多様化する社会環境の中で、文部科学省は、近年、「キャリア教育義務化」の方針を打ち出しています。本学園においても学生へのキャリア教育の充実を図るため、キャリア科目の新設、再編が検討され、まず今年度から、大学の文学部(英語英米文学科、神戸国際教養学科)、家政学部(家政学科、管理栄養士養成課程)では2年次生を対象に「マイライフ・マイキャリア」、短期大学では1年次生を対象に「キャリアへのアプローチI, II」、各学部・学科の特色に沿った、低学年次学生へのキャリア支援に関する科目が開講されました。

大学の「マイライフ・マイキャリア」は自分の強みや弱みをもつめる自己分析にはじまり、今「企業が何を求めているのか」を確認し、後半には、マスコミ、旅行、アパレル、金融、サービスなど様々な業界の方々をお招きし、仕事理解を深める構成となっていて、目標設定やキャリアデザインを描くための基本的知識を得ることを目標とした、学生のキャリア意識を高めるカリキュラムになっています。

短大の「キャリアへのアプローチI, II」は、女性のための労働知識やワークライフバランスについてなど、学生が自らライフデザインやキャリアデザインを描くことができるように、また、職業人・社会人としての常識や知識を身につけるための講義を展開しています。就職活動にスムーズに入れるようにエントリーシートや履歴書の書き方の実習、模擬面接や社会人としてマナーやビジネスマナーも学びます。

大学・短大の両講義とも、担当教員のほか、外部講師をお招きしてのゲスト講義も複数回組み込まれ、就職活動を将来に控えた学生にとって、キャリア意識の向上をめざす実り多い内容になっています。



短大「キャリアへのアプローチ」  
人事課統括が運営する外部講師による授業  
(エントリーシート・面接・履歴書)の作成研究のアドバイス



短大「キャリアへのアプローチ」  
総合生活学部専攻生による実習  
(面接準備・履歴書の作成・面接練習)の指導と面接官としてのアドバイス



大学「マイライフ・マイキャリア」  
神戸新聞社 現社 専任講師委員による講義

## 神戸女子大学須磨キャンパス図書館の紹介とイベント

須磨キャンパスの神戸女子大学図書館では、現在、蔵書数約260,850冊、雑誌タイトル数は国内約2,450種、国外は約452種を所蔵し、学生の学習や高等教育及び学術研究活動全般を支える重要な学術情報基盤の役割を担っています。

本学の特徴あるコレクションとしては、近世芸能資料を有する「森修文庫」、国文学関係資料として「石原文庫」「伊藤文庫」、英文学を中心とする「和知文庫」、民俗学関連の「喜多文庫」、そして「現代詩文庫」などがあります。

今回は、本学が行っている特色ある図書館の活動イベントを紹介します。



第20回チャットルーム講師の藤原喜美子さん

### チャットルーム20回目の開催

「開かれた大学づくり」の一環として、平成16年にグループスタディ室(4階)を使って始めたのがチャットルームです。学外で活躍している地域の方や先輩たちを講師に招き、「コミュニケーションの場」及び「ゆとりの場」を提供するために、年に2-3回開催してきました。現在は、図書館を知的財産集積の場であると同時に、情報発信の場と捉え、学生が社会との接点を見出し、言葉を通じて社会と交流する場となることを目的に企画を立てています。対象者は学生、大学院生、聴講生など学内関係者で、平成23年11月に第20回目を迎えました。

今回のテーマは「本を出版した先輩の話」です。講師は、文学部史学科の卒業生である藤原 喜美子さんです。主な著作に、「オニを迎え祭る人びと—民俗芸能とムラ (御影史学研究会民俗学叢書17)」があります。現在は、流通科学大学総合政策学部准教授として活躍されています。

藤原さんは、普通的女子大生が研究者になったきっかけや民俗学を研究する楽しさなどについて話され、参加した学生の質問に、熱心に答えてくださいました。大学で学修できることはめくまれた環境にいるのだから、それを生かしてステップアップしてくださいと、学生に先輩としての貴重なアドバイスをしてくださいました。

### 教員推薦図書コーナー

各学科の先生が持ち回りで各々の専門領域を紹介するコーナーが2階にあります。各々の専門分野のスペシャリストが皆さんに是非読んでほしいと推薦する本が並んでいます。

各先生の宇宙を知ることができますし、並べられた本を読むことによって、各先生の世界に近づくことが可能です。推薦理由の文章を読むのも楽しみの一つです。専門が同じ学生にとっては、興味のある分野をより深く学修するための指標となり、また自分の所属する以外の学科では何を学んでいるかを垣間見ることができ、大変好評です。

現在までに、推薦された本は次のURLから見ることができます。

<http://lib.yg.kobe-wu.ac.jp/suisentoshio10.html>



教員推薦図書コーナー

### 読書マラソン

学生の活字離れに少しでも歯止めがかかればという思いから、在学中に100冊以上の本を読むことを目指す「読書マラソン」を平成19年10月から実施しています。

「読書マラソン」に参加するためには、まずエントリーして、感想カードを提出します。カードを提出することにポイントがたまり、獲得ポイントによって年間優秀者表彰を行っています。

また、学生のお勧めの書籍に感想を書いてもらった帯をして、さらに読者を広げる「読書マラソンコーナー」(3階)も設置しています。



読書マラソンのコーナー



読書の感想が書かれた帯をした本



## 国際交流

### 交流年表

(姉妹提携等)

1983年	ハワイ大学(米国)	2007年	チェンデラワシ大学(インドネシア)
1993年	ケント大学(英国)	2010年	ウダヤナ大学(インドネシア)
1997年	フライルク大学(独逸)	2010年	西安工程大学(中国)
2000年	華南師範大学(中国)	2010年	カセサート大学(タイ)
2006年	ガジャマダ大学(インドネシア)	2010年	高麗大学(韓国)
2006年	オークランド工科大学(ニュージーランド)	2011年	チェンマイ大学(タイ)
2006年	ピッツァー大学(米国)	2011年	カリフォルニア州立理工科大学ポモナ校(米国)

## オックスブリッジ英語サマースクール2011

イギリスのオックスフォード大学及びケンブリッジ大学の学生が組織する Oxbridge Summer Camps Abroad (OSCA) の学生2名を講師としてオックスブリッジ英語サマースクールを



弓道体験

2011年7月28日(木)～8月5日(金)に須磨キャンパスで実施しました。今年にはケンブリッジ大学から香港出身のミシェル・リー(Michelle Li)さんとポーランド出身のアーチャー・レズカ(Artur Reszka)さんを迎え、

神戸女子大学の学生23名が参加しました。ファッションについての授業では、ゴミ袋や新聞紙で洋服を作成し、授業で習った英語表現を使いながら、ドレスのコンセプトやデザインを発表するなど、工夫を凝らした授業に学生は楽しみながら、英語のみ使うことを心がけ、積極的に参加していました。また、弓道体験のほか須磨海浜水族園や花火大会などの行事にも参加してもらい、交流を深めました。終了後に参加者へ実施したアンケートでは、「来年も参加したい」「期間を長くして欲しい」と好評でした。



授業風景

## ニュージーランド・オークランド工科大学(AUT)学生 神戸女子大学を訪問



左から波田学長、マリカさん、ケリー教授



阪口教授の授業で紹介されるマリカさん

独立行政法人国際交流基金の支援による6週間の日本語研修に参加するために2011年9月から来日していたオークランド工科大学(AUT)学生、マリカ・ジャクソン(Marika Jackson)さんが10月5日(水)～7日(金)の期間、須磨キャンパスを訪問しました。初日には、神戸女子大学波田学長とケリー国際交流推進部長を訪問し、受入担当教員である文学部日本語日本文学科の安原 順子准教授のゼミや阪口 弘之教授他の授業に参加しました。お昼休みなどの空き時間は学生との交流を楽しんでいました。ホームステイは近隣のご家庭が快く受け入れてくださり、純和風のお家でお寿司と一緒に作るなど、思い出深い体験ができました。

## 神戸女子大学 グローバル・ローカル研究会 2011年度 特別講演会

2011年10月12日(水)須磨キャンパス図書館AVホールにおいて、グローバル・ローカル研究会(文学部神戸国際教養学科の教員・学生で組織、年1回、国際的に活躍している方の講演を行っている)主催で、日米友好基金所長、日米文化教育交流会議事務局長、日米交流財団所長ペイジ・コッティンガム・ストリート氏(Paige Cottingham-Streeter)による特別講演「パブリック・ディプロマシーにおける人と人との交流-健全な日米関係構築に向けて-」が開催されました。

神戸女子大学波田学長、文学部神戸国際教養学科の教員9名、学生97名が出席し、同学科のアンケータ教授の逐次通訳付で進行しました。

講師の「多くの若い女性の前で日米の交流、人と人との交流について講演できることは大変うれいす。皆さん、女性の教育にパイオニア的な役割を果たしている大学で学習していることは幸運ですよ」という挨拶で講演は始まりました。

異文化の交流の重要性を学び、日米の交流に実際に関わっている方の話を聞くことができました。パブリック・ディプロマシーの具体例の説明や個人的な経験を通してのその関わり方、スキルや姿勢、今後の学習や進路についての重要な指針を与えていただきました。講演終了後には、学生より政治及び文化面からの質問があり、熱心な学生の姿勢に感心されたようでした。

以下、講演の概要を紹介します。

日本とアメリカの両国の学識者で構成され、日米の政府に文化・教育分野での交流の促進と相互理解の向上のアドバイスをおこなう日米文化教育交流会議(通称 カルコン CULCON)で「パブリック・ディプロマシー」は推進されています。

アメリカの「パブリック・ディプロマシー」について、特に人と人との交流がどのようにより日米関係に貢献できるかについてお話しします。私は、小学生のときから日本に関心があり両親と親日しました。学生時代にはアジア地域の勉強を行い、政治学、法学を学びました。弁護士資格を得た後、1988年にJETプログラム(※注)の教員として再来日しました。経済的、政治的に軋轢の高まっていた時で、日本の現状を自分自身の目で確かめ、日本人にアメリカのことを伝えたいと思いました。この時、相互に理解することの大切さとその方法を学びました。

友好な日米関係の構築に効果的な方法の一つが「パブリック・ディプロマシー」です。外交官レベルと同時に進行しており、オフィシャルなものも効果的と考えます。その定義はアメリカの国家的な関心を海外に理解してもらうために推進するもので、①アメリカ政府がスポンサー、②アメリカへの理解の推進と誤解の軽減、③一般市民にターゲットをおく、の3つがポイントです。具体的な例として、日本の大学がグローバル奨学金でアメリカの大学の教授などを招き学術の交流をする。日本の学生がアメリカの大学で学習の機会があるかを探る。国会のメンバーや若手の経済学者がアメリカの都市を視察、政府の役員に面会する。アメリカの多様なジャンルのアーティストが日本の聴衆の前でパフォーマンスをするなどです。人と人との本当の交流は直接に意見交換をし、共通の体験がなければ成り立ちません。両国の政府は人の交換を重視しています。モーリン・アンド・マイク・マンスフィールド財団と日米交流財団がその役割を担っています。

皆さんにできることとして以下の5つをあげます。

1. 外国語を勉強すること、2. 異文化、国際的な経験を持つこと、3. さまざまな分野の専門家に学びそして交流すること、4. パブリックスピーキングの技術を身につけること、5. インターンシップやボランティア活動を通じて職業となる技術を身につけること、です。

皆さん、自分が将来進む道にとつながる今の勉強をがんばってください。

(※注)JETプログラム:日本政府主催の国際交流事業。語外居の人々との相互理解を深めるため、外国語教育を推進し、日本の地域国際化を推進することを目的とする。



講演中のペイジコッティンガム・ストリート氏



ペリ教授と和やかに打合せ



学長室を田中の野村 和典准教授と訪問